

多発性骨髄腫に対する自家造血幹細胞移植-移植非完遂例を含めた解析-

谷村聡<sup>1</sup>、山形昇<sup>2</sup>、川畑公人<sup>1</sup>、奥田慎也<sup>1</sup>、平井理泉<sup>1</sup>、松丸睦<sup>1</sup>、萩原蔣太郎<sup>1</sup>、三輪哲義<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 国立国際医療センター血液内科、<sup>2</sup> 高の原中央病院血液内科

**[目的]**多発性骨髄腫(MM)に対しては、通常化学療法に比べ自家造血幹細胞移植(ASCT)を併用した大量化学療法が、寛解率、生存期間において優れていることが明らかとなってきた。しかし、本邦では、移植非完遂例を含めた ASCT の成績は殆ど報告されていない。purging の優位性が否定的となった 1998 年以降の non-purged な ASCT を目指した MM63 例に対する当科の治療成績を報告する。**[方法]**1998 年-2004 年の間に治療を開始し、当科での移植を目指した 70 歳以下の進行期 MM の患者で以下の基準を満たすもの。心肺機能が保たれているもの。腎機能については MM 関連の腎機能異常は除外しない。前治療歴は問わない。なお、当院での加療中は、月 2 回のビスフォスフォネート(BP)製剤の投与を併用した。移植前治療、幹細胞採取術、ASCT の完遂率と各段階の治療効果、生存率(OS,PFS)、移植関連死亡などを解析した。**[結果]**解析対象症例は 63 例。移植 46 例(1 回移植 24 例、2 回移植 22 例)、移植に至らなかった症例は 17 例。4 年の全生存率は全症例で 65%、移植症例で 74%、非移植例で 34%であった。全 68 移植における TRM は 2 例(2.9%)であった。移植 100 日後、BP のみ投与中に寛解に至る症例も観察された。**[結論]**MM に対する ASCT の効果が確認できた。TRM を 2 例に認めたが、臓器機能が保たれた比較的若い症例については大量化学療法を施行するべきと考えられる。